

徹夜の勤務も当たり前！ ドラマと違うハードな現場

「基本的に科警研の職員は公務員ですから、勤務時間は朝9時から夕方5時までの8時間勤務になります。とはいえ、私がいたころは研究員90名くらいで、私のおりました音声研究室は3人のチームで

分析をおこなっていたので普段も終電で帰ることがしばしばでした。誘拐事件が起こったりすると3〜4日は帰宅できず、ほぼ不眠不休で分析する。そのうちに自分は何をやっているのかわからない状態になるんですよ」

と鈴木さんは笑う。研究員はみんな国家公務員I種試験に合格した公務員。給与も国家公務員の給与規定に沿った額を手にしている。綾瀬はるかのような女性研究員は全員の2割程度だという。

写真のような研究のほかにも、爆破事件の研究では直径7センチ、高さ6センチの実験室で爆発物を実際に爆発させたたり、大がかりな実験がおこなわれている。

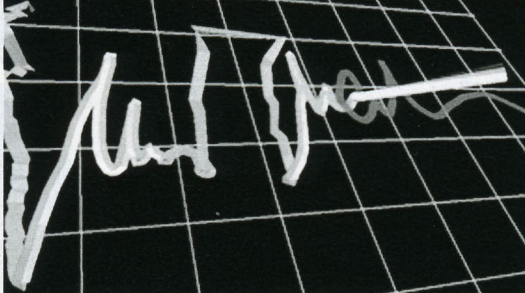
音響工学を研究していた鈴木さんが思い出を話す。「たとえば踏み切りの音だつて、鉄道会社や路線によって違うんですよ。かつてデータベースもなく、この踏み切りの音は何線の音だろ?と鉄道関係者のあいだを聞かせて回りました。人の声だと思つて調べていた音声が、じつはオウムの声だったなんて笑い話もありましたね」

車を燃やして実験!



火災の原因究明には、このような大がかりな再現実験が欠かせない

筆跡鑑定に科学の力が



習字中のペンの動きを機械で再現。筆跡鑑定とは見比べるだけではない

「たとえ踏み切りの音だつて、鉄道会社や路線によって違うんですよ。かつてデータベースもなく、この踏み切りの音は何線の音だろ?と鉄道関係者のあいだを聞かせて回りました。人の声だと思つて調べていた音声が、じつはオウムの声だったなんて笑い話もありましたね」

技術は進歩しても、事件の真相に迫ろうとする研究者の心は変わらない。

「声から顔を割り出して」 持ち込まれる無理難題

無理難題を頼まれることもある。

「私は電解研磨法という分析をおこなっていました。盗難車の削られたエンジンナンバーを、浮かび上げらせるんですよ。すると『これもできるだろう』と、クワの柄の刻印が削られているのを、浮かび上げさせてくれと依頼されました。でも、塩酸や硫酸を使って電気化学的におこなうので、金属製のエンジンではできません、木の柄ではできないんですよ。」

よく言われるのが「声から顔を割り出してほしい」「年齢や性別、職業を割り出してほしい」といったリクエスト。声の響き具合で骨格がわかるなんてよく言われています。声一つで顔かたちまでわかるなんていうのはそれこそドラマの世界だけの話。今後、科学が進歩したとしてもできないでしょう」(鈴木さん)



女性の所員も増えてきた!

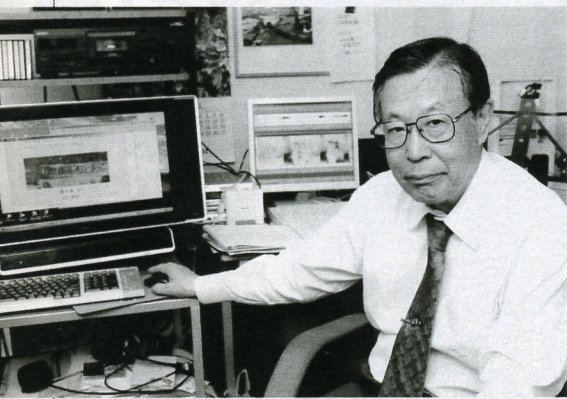
違法薬物の乱用を防ぐため、薬物の分析装置を操作する女性



頭蓋骨から故人の顔が

頭蓋骨と顔写真を重ね、個人を識別するスーパーインポーズ

技術は進歩しても、事件の真相に迫ろうとする研究者の心は変わらない。



「判断に困ったときは、わかりません、と言うしかない」と鈴木さん

あの重大事件でも、科 警研が活躍していた!

科学捜査の粋を集めた科警研。日本を震撼させた有名な事件でも、大活躍している。



「グリコ森永事件では、真犯人とは全く関係ない便乗犯から脅迫電話がたくさんかかってきました。それを音声分析して、便乗犯を区分けする。休日返上で鑑定をしました。私は直接関わっていませんが、地下鉄サリン事件では衣類に付着したサリンの成分の検出を科警研でもおこないました」(前出の鈴木さん)

「科警研」その実力と限界は?

「テレビの影響なのか、携帯電話で撮った荒い画像から人の顔を判別できる、などと無茶なことを考えている人が増えています。確かに画像をきれいにする方法はいくらでもあります、それで出てきた顔が本当に犯人かどうかはわからない。私たちは不確かな情報から物事を判断したくないんです」(鈴木さん)

華やかなドラマの展開とは違い、日々の徹夜と地道な作業から成り立っている研究員たちはまさしくプロフェッショナルだった。